
『禁・三国無双』 ～孫呉編～

こんたそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『禁・三国無双』 〱孫呉編〱

【Nコード】

N6422Y

【作者名】

こんたそば

【あらすじ】

後輩が持つて来たゲームをサークル仲間と共にクリアしようとスィッチを入れた俺は、自分自身が育ててきたキャラクターに憑依した上でゲームの世界に入り込んでしまった。

ヒロインの攻略方も、ストーリーの行方も分からないがやれることはやっていくしかない！

目指せ、ハッピー・エンド！！できればヒロインと添い遂げたい！！

プロローグ

プロローグ

俺こと、北郷一刀はとある大学の3年生。

専攻は教育学部、趣味は歴史。戦国時代や三国志などのことが話題に上るとちよつと燃える。

1年生の時に『歴史研究同好会』というサークルを立ち上げて、日夜資料を読み新しい発見を模索して……いるようなことはない。趣味の合う友人や後輩と共に会話して盛り上がったたり、戦国武将や三国志の英雄をモチーフとした漫画やゲームをして楽しい時を過ごしたりしている。

最近、特にはまっているのが後輩の篠塚健治が持って来た『禁・三国恋姫』というエロゲである。

ちなみに媒介はD C Pという小型の携帯ゲーム機だ。ドリーム・キャスト・ポータブルD C Pの魅力は無線ネットワークを使い複数の人間で同じゲームをプレイし攻略できること。

『禁・三国恋姫』というのは、一昨年辺りにパソコンゲームとして発売され、バグや修正を経てD C Pにおいて発売されることになったもので価格は新品で8860円と高額だが、購入者の反応は上々である。

ヒロインは全員可愛いし、そのヒロインたちと絡むシーンCGもかなりエロくて最高である。

ただ、そこまで行き着くには長くて辛い過程がある訳で……。

- ・ まず、プレイヤーは自身の分身となるキャラクターを作成する。
- ・ その後、自身が所属する勢力を選ぶ。【蜀・魏・呉・袁・漢・南】の中からひとつ。

- ・ 難易度は南蛮が『Very Easy』、袁家が『Easy』、劉蜀が『Normal』、曹魏が『Hard』、孫呉が『Very Hard』、漢王朝が『Maniac』となっている。

- ・ ネットにアップされるシーンCGは南蛮か、袁家、もしくは劉蜀の三つの勢力がほとんどで曹魏や孫呉はもとより、漢王朝のシーンCGがアップされるのは見たことが無い。つまり攻略者がいないわけだ。

- ・ ちなみにプレイヤーキャラクターがヒロインたちと接触できるようにするためには、キャラクターのレベルを上げて能力値を上げ、將軍又は軍師として登録される必要がある。つまり、周回プレイは必須。加えてひとつの勢力で利用できるのは1人のキャラクターのみ。しかも他の勢力では使用不可という鬼畜ぶり。

で、俺たち『歴史研究同好会』では話し合いの結果、難易度が『Very Hard』の孫呉を攻略するべくキャラクターをエディットした。ちなみに名前を考えるのが面倒であった為、孫呉ルートヒロインとして登場しない孫呉の武將の名前をつけることにした。俺の場合は、太史慈だ。真名は本名の一刀を使用。

- ・ そうそう、【真名】っていうのは『禁・三国恋姫』の世界観に

あるその人の個性や生き様を表す神聖な名前で、親兄弟や信頼の置ける仲間などにしか教えないものだそう。異性に真名を教えるっていうことは、そういう関係になったという合図らしい。

ちなみに一緒にプレイする人間をここで紹介しておく。

篠塚健治 後輩 使用キャラクター名：魯肅

笹本京一郎 先輩 使用キャラクター名：徐盛

及川肇 同級生 使用キャラクター名：韓当

といった感じだ。真名は俺と同じように本名の名前を使用している。

さつきも説明した通り、『禁・三国恋姫』というエロゲの真髓に辿り着くまでには最低でも2周はしないとけないということで、俺たちは1周目と2周目のイベントフラグを一切無視して、自分の分身たるキャラクターたちの育成に専念した。おかげで2回とも独立後の曹操軍との戦いで敗北しゲームオーバーとなった。

1周目の時は「まあ、仕方がないさ。よし、次だ！」と思っただけ。

2周目の時は「王が不在って何だよ、これ！？緊急事態、王が戻るまで防衛をしてくれ……」って、10万の兵をたった4000人とか無理だろ！！はあはあ、王発見？よし、盛り返すぞ！って、曹操軍の刺客によって王が討たれた！？孫呉軍の士気がガタ落ちっ！？ふざけんなああああああ！！！！」ということで、4人で暴れた。

で、本命の3周目に至るわけだ。

「かずぴー、恨みつこなしやで」

「勿論だとも」

「ふふふ、楽しみだね」

「先輩方、こればかりは譲りません！」

俺たちは色とりどりのDCPを机の上に置き、向かい合っている。

「覚悟はいいな、お前ら」

俺の掛け声に頷く3人。

「いくぞ！最初はグー、じゃんけんぽん！」

俺…パー

健治…チヨキ

笹本先輩…パー

及川…パー

「やったー！僕は本命の陸遜ちゃんをお願いします」

・ 最後に言い忘れていたが、恋人になれるヒロインは1周につき1人と決まっている。ハーレムは不可能ということだ。ただ、無線ネットワークを繋げて一緒にプレイしている人間にはシンCGが

送られて共有することができる。

結局、俺は負け越したのだが本命であつた孫呉の王である孫策は皆選ばなかった。俺が彼女を選ぶといつたら、皆に『お前、マジかよ』みたいな目で見られた。悪いかよ、コンチキショー。

で、4人揃つてDCPのスイッチを入れたのだが……

気付けば、俺は鮮やかな紅い鎧を身に纏い荒野に立っていた。

健治はどこぞの商人みたいな服を着込みその手には扇、笹本先輩は白い服の上に青い鎧を身に纏い大きな斧を背負い、及川はモンゴルの遊牧民が着ていそうな民族衣装みたいな奴を着ていた。

「「「「「は…どう?」」」」」

一話

一話

20年近く生きてきたが1度も遭遇した事の無い今現在の状況に戸惑いながらも、俺は遠くの方に見える山々を眺めて心を落ち着かせていた。

ありえない…と切って捨てることは簡単だが、身に纏う鎧の感触や重量感、頬を撫でる風の匂いなど現実味を持たせるには十分なものだ。間違いない、考えたくはないが俺たちはゲームの世界に何らかの理由で紛れ込んでしまったのだ。

元の世界に帰れる保障は無いけど、生きていくためには……って、

「俺がシリアス風味にあれこれ考えているのに、お前らは何やってるんだよっ!!」

「先輩、考えるよりも先に自分の状態を確認しないとやばいですって。兵士数がゼロになっているから、ここで賊に襲われたらまずいですって」

「そうか？」

健治はそう言って緑色のDCPを操作する。よくよく見れば笹本先輩も青色の、及川も赤色のDCPを操作している。

彼らに倣って俺も手に持っていた黒色のDCPを操作して、自身の状態を確認する。

「……とりあえず、育ててきた『太史慈』の身体らしいな。これなら、しばらく兵はいなくても大丈夫だろ」

気配を感じて顔を上げるとニコニコと笑みを浮かべた笹本先輩が目の前に立っていた。

「そういえば一刀くんって、資金が溜まったらキャラクターや部下の強化に専念していたよね。ちなみに一刀くんの攻撃力ってどのくらいなの？」

「えーと、……2万と10ですね」

「『2万!?!?!』」

俺と笹本先輩がいる所からちょっと離れた所にいた2人も俺の突然の宣言に驚き、作業を中断させて近くにやってきた。

3人が俺のDCPの画面を食い入るように見つめ、頬を引き攣らせた。

【ステータス】

名前：太史慈 字：子義 真名：一刀 資金：190

体力：6000 攻撃力：20010 防御力：15000 移動力：200

兵士最大数4000人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

スキル（自発）

『大号令Lv3』：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「かずぴー、いくらなんでもこれはないわー」

「ゲームバランスの崩壊もいいところですつて。確か孫呉編の最大の難関である曹魏軍の曹操でも攻撃力3000に、固有武器『絶』の攻撃力3000を足しても6000ですつて。まあ、あちらの最大兵士数は10000人ですけど」

「一刀くんの部下も大概チートだね。その分、コストがべらぼうに高いけど」

「言わないで下さいよ、笹本先輩」

「ハハハハハ」

俺たちは談笑に近い雰囲気の中、自分自身の状態を把握していった。

「さて、これからどうする?」

俺がこう切り出すと及川と笹本先輩が腕を組んで悩み始めた。

これがゲームの場合、悩む必要もなく孫呉編の主要キャラクターの1人である黄蓋に連れられて、一兵士or一將軍、一軍師として雇用される訳だが。

「ぶっちゃけ、袁術軍の客将となっている孫呉軍に行くメリットはないですよ。資金半分と兵を雇うコストが2倍になるのは痛すぎです。特に北郷先輩には」

健治が皮肉を交えて言い放った言葉に及川と笹本先輩は大きく頷いた。

くそう、別にいいじゃないか。最強無敵の軍って憧れるだろ。

「ここで僕は、最初の内は孫呉軍に加わずに建業などの街で太守となることを提案するって。この世界では官位をお金で購えたはず。ゲームをやっていたときは孫呉編にどうせ行くのに無駄な選択肢だなんて思っていたけど、今現在の状況なら自由気儘に動ける拠点も得られて、兵力や資金を集めるのに丁度いいと思うって」

「うん。その流れで進むっていうことは孫呉軍が袁術軍から独立した辺りで同盟なり、不可侵条約を結ぶってことか」

「憧れのヒロインと生身で絡めるって思っていたけど、それよりも自分の命の方が大切ですからって」

確かに…、と健治の言葉に俺自身同意する。

あの小麦色の母性を中心に色んな所を俺の自由にしたいっていう気持ちは勿論あるが、それよりも生きて元の世界に戻りたいっていう気持ちの方が強い。

「当面の方向性はそれでいいかな？」

と、笹本先輩が俺たちの意思を確認するように見渡す。

「それでええと思うで。ワイとしても、拠点があるほうが動かしやすいんや、アレ」

及川はどこか遠くを見ながら了承の言葉を発した。そういえば、及川のキャラクターってどういう方向性だったっけ？健治は完全に内政向きなキャラクターだったし、笹本先輩のは奇襲をかけて敵の数を減らすことに特化していたはず。及川のキャラクターが活躍していたのって……反董卓連合の時の関攻めの時か。つまり攻城戦が得意なキャラクターってことだよな。

でも、それがなんであんな態度になるんだ？あいつの武器ってなんだったっけ？

「それじゃあ、先輩方。資金50000で、建業の太守の座と官位を買いますよって。ぽちっとな」

【ピロリン♪『太史慈』は『建業の太守』となった】

「5万をポンつと出すとはすげえ……………って、太史慈って俺じゃ

ん!？」

周囲を見れば3人に「何を今更」的な眼で見られていた。

「王が一番強い者を置いておかないと拙いでしょ。固まるのも偶にはいいけど、今はさっさと建業に向かうよ。太守さま」

「そうやで、かずぴー。色々とせなんことは山ほどあるんやからなま、太守の場合は文字通り山の如くあるんやろうけど」

「先輩、僕らも“少し”は手伝いますから、頑張つて生き残りましたよね。余裕が出来たら、ヒロインとにやんにやんしたいですって」

「健治!本音が駄々漏れだぞ!！」

「大丈夫です、ワザとですからって」

おいおい。生き残れるのか、このメンバーで。先々が不安だ…。

二話

二話

健治の資金50000を払い、俺は建業の太守となった。

建業といえば孫呉の本拠地となる場所ではないかと思うかもしれないが、孫堅が生存していた時の本拠地は荊州の長沙であり、孫策らが袁術軍の客将となったのなら寿春の近辺にいるだろう。

俺が建業の太守となってはじめにやったのは、ユニットの作成だった。資金は健治持ちで。

ここで『禁・三国恋姫』のユニットについて説明しようと思う

・ まずユニットの追加についてだが、国のレベルによって生み出せるユニットのランクや種類が変わってくる

・ 現在はレベル1の状態なので、一番弱い『新米指揮官』コスト：150を作成しようと思う。

・ その後作成したユニットに名前をつける。今回は分かりやすいように【田中】とつけておこう。

【プロフィール】

名前：田中

体力：300 攻撃力：160 防御力：120 移動力：100

兵士最大数：100人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

・ 作成したユニットは一度作成したら消去できない。代わりに、最大100人まで作成できる。ただし周回プレイには持ち越せない
ので、そこら辺は注意しよう。

・ 部下になる兵士もここでつけておく。が、現在の建業の街に必要なのは戦闘に必要な兵士ではなく、俺たちの街を築く要員となる
わけで、今回は建築スキルを持つ市民兵をつけておく。

名前：田中隊 兵種：市民兵

体力：3 攻撃力：2 移動力：100 コスト：6（1人につき）

スキル（自動）

『建築Lv3』：建物をすごい速さで建てる事が出来る。兵士数
によって効率があがる

・ と、まあこんな感じである。

ゲームであれば、ユニットを量産して建築や農業・漁業、武器防具
開発など片っ端からやれたのだが、悲しいかな。この世界には俺た
ちと同じように生きている人間が多く存在する。彼らを蔑ろにして
建業の発展はない。

ということ、最初は建業自体を住みやすい街に変えていこうと思う。

俺たちは公共事業として、街で暇していた若者や仕事が無い者たちを雇って、メインストリートの拡張をして人通りを楽にした。その際、立ち退いてもらった方々には田中隊が立てた別の家に移り住んでもらったり、メインストリート脇に建てた店に入ってもらったりした。

街道整備なのだが、これは他の街と道を繋ぐことで流通をよくするために必須なのだが、今のところは近くの村に伸ばす程度にしておこう。

治安をよくするために元の世界でいう交番を建業の街の至る所に作った。何かあったときのためにいくつかの交番には『新米指揮官』のユニットを何体かおいておくでしょう。

内政に関しては次の機会にでも…ということ。

「健治の財布はとんでもないことが分かった所で、笹本先輩…ゴホン。徐盛、各地の状況を説明してくれ」

「一刀くん、慣れないのは分かるけどしっかりしてよ。まあ、いいや。とりあえず、僕の兵たちを各地に散らばらせて分かったことだけど、長沙の太守の名前は孫文台っていうんだってさ。年代に関しても『禁・三国恋姫』の舞台よりも結構前みたいだよ」

「それじゃあ、しばらくの間は内政オンリーやな。しかと農業や漁業、武器防具の開発等をやって地力をあげておけっていうゲームの

神さまからの啓示やる。商業に関しては健治がやるやろっから、ワイは開発関係をやるかな。先輩は何をします?」

「そうだね、今まで通り情報管理と農林水産関係は僕がやるのかな。一刀くんは、一般兵士の鍛錬っていう所じゃない?」

「「「ま、太守の仕事をきっちりやってからの話だけど(ね・って・な)」「」」

「それひどくね!?!」

結局、俺の意見はまったく取り入ってもらえず、部屋に戻った俺は仕方なく判子を右手に、【ぺたこん】【ぺたこん】と目を通した書類に判を押していく日々。

それから暫く経った、雲ひとつ無い青空でお洗濯日和だなあと思つて窓の外の景色を眺めていたある日、

「大変ですつて!海賊が現れましたー!」

息を切らしながら健治が俺の執務室に走りこんできた。

俺は素早く自分のDCPを手にとって画面を見る。するとそこには『Warning』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、敵の情報が浮かび上がった。

【白髭海賊団】 兵士総数5万

海や河に面する街や村を広範囲で襲う海賊団

官軍において、団長である白髭（名前は不明）には手を出すなどいわれるほど危険な力を秘めているらしい

「戦いますか？ 戦いませんか？」

- ・ 戦うなら戦争パートに移ります。

・ 戦わないなら、国レベル・資金・住民感情が激減します

「……健治、こんなイベントってあったか？」

「記憶に「ざい」ませんって。どうします?」

「そんなの戦争するに決まっているだろうが！俺の地道な政務結果をこんな簡単に潰させて溜まるか！！健治、お前の資金で俺の兵を10体生み出してくれ。ここに喧嘩を売るということがどんなに愚かかっていうことなのかをその身に刻んでやる！！」

【ピロリン♪ 太史慈隊】が発足しました。現在10人

「よっしやあ ああああ！逝ってくるぜえええええ！」

俺は武器を片手に走り出す。その後ろに白髪で動物の顔を模した面を被った屈強な青年たちも続いてくる。負ける気がしないぜっ！！

「……先輩、ストレス溜まってたんだなあ」

備考

名前：太史慈隊 兵種：強化兵

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100
0（1人につき）

スキル（自動）

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

三話

三話

【VS白髭海賊団】

『勝利条件』

- ・ 敵軍の戦力を70%減少させる
敗北条件

- ・ 建業の街（本拠地）への敵軍到達』

DCPに映し出される勝利敗北条件の確認を行った俺は自軍の戦力を冷静に見据える。現在の段階で5万という戦力とまともに戦えるのは俺たちくらいだ。街の人と新規ユニットの組み合わせが戦場に出ても戦果は期待できない。

「えーと、こちらの戦力は俺（太史慈隊）と…徐盛隊。街の防衛は及川…じゃなくて韓当隊が務める。3部隊だけじゃ心細いから警邏隊をいくつか建業の街付近に配置しておくとして、作戦としては俺が最前線で敵の数を減らして、徐盛隊が討ち洩らしを確実に仕留めるのがいいか」

「一刀くん。それは方針であって、作戦じゃないからね」

「……本職の軍師ほしーな」

俺はそのことを切実に思った。

『Warning』

という赤い文字が表示され、敵軍の侵攻を確認した俺は自分（太史慈）のスキルである『大号令Lv3』のことを考えた。

この『大号令Lv3』は自軍の攻撃力を15%上昇させる上に、自分の最大兵士数の15%にあたる人員を毎ターン補充することが出来る。使用回数は『Lv』と同じため3回である。つまり『大号令Lv3』を3回行えば、俺の最大兵士数である4000人に達するのだ。及川や健治にチートとか、これはないとか、ゲームバランスの崩壊とか言われるのはこれが原因である。ただし、ゲームの時は選べば良かったが、この世界に俺が存在している場合どうすれば発動するのだろうか？とはいっても今現在の太史慈隊のステータスでも

『太史慈＋太史慈隊 体力：7000 攻撃力：21010 防御力：15000 移動力：200』

このくらいはあるのでぶっちゃけ、ただの賊程度では話にもならないですよ。

敵軍は川岸に着けた艦隊から続々とユニットを出している。

敵軍のユニットをランク別にとこんな感じである。

・Lv1：『海賊団・小隊長』&『海賊下っ端兵数500人』の組み合わせが60組

・Lv2：『海賊団・中隊長』&『海賊下っ端兵数1000人』の組み合わせが10組

・ L V 3 : 『海賊団・幹部』 & 『海賊下つ端兵数2000人』の
組み合わせが5組

【敵軍ステータス】

『名前：海賊団・小隊長 体力：560 攻撃力：640 防御力：
60 移動力：144 最大兵士数：500人』

『名前：海賊団・中隊長 体力：1340 攻撃力：800 防御
力：300 移動力：156 最大兵士数：1000人』

『名前：海賊団・幹部 体力：2500 攻撃力：2600 防御
力：1050 移動力：168 最大兵士数：2000人』

『名前：海賊団下つ端 体力：8 攻撃力：6 移動力：156』

となっている。

という訳で、今回の白髭海賊団の戦力を数値化すると、

L V 1 が 『体力：4560 攻撃力：3640 防御力：60』

L V 2 が 『体力：8340 攻撃力：5600 防御力：300』

L V 3 が 『体力：18500 攻撃力：14600 防御力：10
50』

となる訳である。

見て分かるとおり、体力と攻撃力はずば抜けて高いが防御力は紙同然。これは『禁・三国恋姫』に出てくるほとんどのユニットにいえることだ。確かに戦いにおいて体力も攻撃力も必要だ。だが、それ以上に必要なのは防御力といえよう。何せ、そのユニットが生き続けるかぎり、その部隊は死なないのだから。

「とりあえず、最前線に行ってきますね。後のことはよろしく願います」

「了解したよ、一刀くん。僕としても皆が住む建業の街を滅茶苦茶にされるのは望む所では無いしね。……では、太史慈さま、皆に聞こえるよう号令を」

俺は徐盛の言葉を聞き頷いた後、全軍の前に立った。そして、歩兵たちに向けて大音声を張った。

「全軍、武器を取れ！」

『ガアン』と銅鑼の音が鳴り響き、待機を命じられていた兵たちの視線が俺を捉えていく。

ちなみに銅鑼を鳴らしたのは、脇に控える徐盛である。

俺を見つめる兵たちに向けて、俺は建業の太守として、皆の命を預かる將軍として、可能な限り悠然と構え、朗々たる声を張る。

「これより我らは、街に迫り来る脅威、海賊団をここで迎え撃つ！」

先陣を務める自分の部隊と徐盛の部隊、街を護る及川の部隊に、戦いを始めて経験することになる元々は農民や商人だった者、そのすべてに聞こえるように俺は精一杯の声を張った。

「奴等は街を襲い、金品や食料、女子供を我らから奪い、己の私利私欲を満たそうとしている獣だ。奴等は己の目的を果たそうと数を以って攻め立ててくるだろう。だが、恐れることは無い。その為に我らがいるのだ。建業に住む人々は我らにとつて家族同然。家族が危険に晒されようとしているのであれば、命を賭けて守り抜かなければならない！命を奪うことに臆するな、兵士たちよ！諸兄らの罪は建業の太守である俺が全て背負う！行くぞ、同胞たちよ！我らの家族を護るために！己が剣に誇りを持つ者よ、我に続けええええ！」

「「「「オオオオオオ！！！！」」」」

即座に大仰な歓声をあげたのは俺の部隊と徐盛の部隊だったが、すぐに歓声は兵たちにも伝播し地鳴りのような波となつて周囲に拡散していく。無我夢中で言つたため、もうほとんど覚えていないがよかったのかな？

【ピロリン♪スキル『大号令Lv3』が発令されました】

「……って、スキルを発動させるためには毎回こんなことをやらないといけないのかよ」

「何を言っているのさ、初めてにしては結構よかったんじゃない。見てみなよ、兵士たちのあの燃える炎のようにやる気になった姿をさ。皆、君に感化されたんだよ。一刀くん、君はもう立派な皆の代表だよ」

先輩はにこやかに微笑んで、最後にこう付け加えた。

「君が僕たちの《王》で本当に良かったと思うよ」
と。

砂埃を巻き上げ、建業の街を襲わんと迫ってくる海賊たちの先陣がまず見たものは、燃える焰のような鮮やかな紅い鎧だった。だが、その鎧を身に纏う兵士は1人や2人ではない。目に映る敵兵全員がそれを着込んでいる。

その兵たちを率いるよう集団の前に悠然と立つ男がいた。

無能な指揮官が馬鹿な真似をしているのだと考えた海賊たちは意気揚々とその男に襲い掛かったが、その認識が間違っていたことに気付く。ただし、気付いたのは仲間が瞬きする間に殺されるのを見た他の海賊たちだ。

男に襲い掛かると同時に幾つもの首が刎ねられ、宙を舞い、ボトボトと地に落ちて荒野の砂で死に化粧を施される。

「突撃！」

何が起こったのかを理解できていない海賊たちの耳に、男が指揮する声が響いた。

男の後ろに控えていた紅い鎧を身に纏った兵士たちが、地鳴りを上げながら殺到する迫力に海賊たちは耐えられない。

男に対して恐れ慄いていた兵たちも、本能で勝てないと悟ったのか、

その場を一目散に退いていく。勿論、彼らに背を向けて。追撃する形で、紅い鎧を身に纏った兵たちが海賊たちを蹂躪していく。

「建業の街を狙った不届き者め、ここから生きて帰れると思うなよ
！！」

指揮官の男が放った言葉に海賊たちが悲鳴を上げる。

まだ、海賊団との戦いは始まったばかりだ。

四話

四話

白髭海賊団との戦闘の最中、僕は最前線で奮戦する大学での後輩である一刀くんの背中を見ていた。そして、思う。

「ふう……。一刀くん、飛ばしすぎだよ」と。

僕はこの身体（徐盛）の武器である『凍てついた戦斧』を肩に担いで溜め息をついた。何せ開戦して間もないというのに、太史慈隊だけで敵軍の約35%近くを葬っているのだ。彼が戦果を上げれば上げるほど、味方の士気は否応なしに上昇する。

「一刀くんは昔からそうだったよね。君の声や立ち振る舞いは、やけに人を惹きつけ好感を抱かせる。ふふっ、……僕もその1人」

その“人を惹きつける力”によって僕たちが生み出した兵ではない、この世界の人々である兵たちに作用し、人数的には劣っていたのに逆に彼らの士気を高める結果に結びついている。それがどうやって身についたのかは知らないが、この状況下において、指揮官として得がたい資質といえる。

「すかした顔し『ヒュンッ』てつつ『バギッ』——」

僕は近くに寄ってきて斬りかかってきた海賊の1人の身体を横に真一文字に薙ぎ、上半身と下半身を分離させる。そして身体を回転させ遠心力をつけた一撃を斬り飛ばした上半身に叩き込み文字通り粉碎する。辺りに血が飛び散ったが、何のことは無い。僕自身、既に

何人もの海賊を殺してしまっていて、命を奪うことによる罪悪感や嫌悪感はほとんどない。もはや、元の世界に無事に戻れたとしても普通に生きていくことは不可能だろう。

敵兵が幾分か少なくなってきたなと感じた僕は、自身のDCPを確認した。案の定、敵の残存兵力は50%を切っていた。

「先輩として、少しは一刀くんの負担を減らさないかね」

僕は武器の戦斧を大きく振りかぶった。そして、精神を集中させ前を見据え言い放つ。

「吹き荒れる、氷結の結晶。碧風…衝破っ！！」

冷気を纏った風が戦場に吹き荒れ、一刀くんたちに武器を向けていた海賊たちの動きを止めた。その直後、風を受けた海賊たちの全身から血が噴出した。一刀くんが不思議そうな表情を浮かべこちらを見てきたので、とりあえず僕は彼に向かって笑顔でサムズアップしたのだった。

目の前で戦っていた海賊の全身から突然、血が噴出した。

一瞬にして血の池地獄を作り出した元凶を見ると、いやにイイ笑顔で親指を立ててサムズアップしていた。

「何かをするんだったら、最初に言ってくれよ」

と、愚痴をこぼしている

【ピロリン♪】

と、音が鳴った。DCPを確認すると勝利条件であった敵の兵力を70%削ることに成功したようだ。勿論、建業の街への被害はゼロだ。俺たちの完封勝利と言っても過言では無い。勝関をあげようと考えた俺の目に、トンデモナイ文字が映った。

名前：白髭海賊団・団長 体力：??? 攻撃力：50000
防御力：50000 移動力：500 総兵士数：0

俺の黒色のDCPの画面に映し出された『白髭海賊団・団長』のステータスを見た俺は戦場にいる太史慈隊以外の兵士たちに大音声で撤退の指示を出す。

「俺たちが殿を務める！全軍、建業の街へ撤退しろ！徐盛は韓当隊と協力し籠城の準備を行え！全警邏隊は住民の避難誘導だ！一刻を争う、全員動けえええ！！」

俺はそう言った直後、DCPを操作して今までの戦いで得ることが出来た資金を使って、自身のステータス強化を行う。上昇させるのは総兵士数だ。

「……海賊団の奴等を結構倒したと思っていただけ、総兵士数を200しか上げられない。……スキルの使用回数が3回に戻っていることだけでもありがたいと考えるか」

「一刀くん、僕も残るよ」

忍者のような格好をした部下を引き連れて笹本先輩、…徐盛が側に

来た。

「駄目だ、先輩。徐盛のステータスじゃ、瞬殺される。それよりも街に戻って軍全体の指揮を執ってください。正直、健治と及川の2人だと、心もとないですよね」

そんなことはない。2人とも俺とは違い優秀だ。健治がいなければ建業の発展はなかった。及川がいなければ、兵士たちは弱くて脆い装備で戦場に出なければならなかっただろう。けど、2人はまだ人を殺していない。

俺は自分の掌を見た。今日のこの戦いで随分と血に汚れてしまった。

1人目を殺した時は足が震え、胃の中のものを全て吐き出しそうになったが、2人、5人、10人、100人と殺した数が増えることに覚悟が決まっていくのを感じた。

俺は此処にいる。

この世界に存在している。

俺は建業という街の太守で、護るべき民が、大切な仲間が俺の後ろにいるのだ、と。

「一刀くん……分かったよ。けど、僕がやるのはあくまで代行。必ず戻って来るんだよ」

「こんなところで死ぬつもりはありません。俺がこの手で殺してしまった命も、俺の後ろにいる護るべき人たちの命も、全て背負っているんですから。戦いで死ぬわけにはいかない」

俺がそう言ったら、徐盛は目を剥き、そしてすぐに眼を擦った。

「ははっ、今一瞬だったけど、大勢の武官や文官を従えて指揮を出している一刀くんの姿が垣間見えた気がする。うん、君はまだ死んではならない。いや、こんなところで終わるはずが無い。僕が保障する」

「先輩……。ありがとうございます」

「それじゃあ、僕たちは街で君の帰りを待つことにするよ。スキル『瞬転法陣』発動！」

先輩がそう言うのと彼らの身体が光に包まれ消え去った。どうやら、味方の所へ一瞬で移動するスキルらしい。

「……一回、先輩たちのキャラクターステータスを見せてもらおう。スキルを把握していないと、何が出来るかわからないじゃないか」

「隊長、敵が来ます」

犬の面をつけた青年が俺に報告してきた。見れば、砂埃を上げて突進してくる物体があった。

「全軍抜刀！死力を尽くせ！だが絶対に死ぬな！奴に勝って、俺たちは全員で帰るんだ！」

「『オオオオオオオ！』『』『』」

俺たちは大地を力強く蹴り、向かい来る敵を迎え撃った。

兵たちの士気を高め、俺自身集中し心を静めていたのだが、敵である『海賊団・団長』の姿を見た瞬間、俺の頭の中は『全く理解できない』という異常事態の為にフリーズ寸前だった。

こんなことを予想できるか？

俺たちは命を賭けて戦ってきた。

街を、民を、家族を、仲間を護るために必死になって戦ってきたのだ。

そして、海賊団の団長が兵を率いずに現れた。

ここまではいい。

俺たちは覚悟を決めて、ここに残った。

だがしかし！

だがしかしだ！

ボディビルダーの如くに鍛え上げられた逞しい肉体“に”、白いビキニのトップスと禪、そしてマントのみを羽織った変態が現れるとか！

誰が予想できるかつ！！

アレの全体を視界で捉えた瞬間、怖気が走ったわ！

たぶん、無感情、無反応を誇る我が太史慈隊の精鋭もしっかりと後退りしていたから、俺の感性がおかしくなったわけではない。

代表として、敢えて言わせてもらおう。

「変態が来たぞー！！」

「誰が変態じゃー！！」

「お前に決まっているだろうが、変態じゃご不満なら化け物だよ！！」

「んなああんじゃとおおお！誰が何年も掛けてやっと咲き誇った満開の桜の木をも一瞬にして散らしてしまうほどバケモノじゃとおおおお！！」

「そこまで言っておらんわあああああ！！」

俺の蹴りが白髭海賊団の団長の顔に炸裂した。『ズシャアア』と砂埃を上げて滑っていく変態を見据えた俺は、太史慈隊に命令する。

「総攻撃チャンスだ！起き上がれないくらいボコボコにしろ！！」

「『了解！！』『』『』『』『』」

殺せと言わない辺り、俺自身分かっていたのかもしれない。この変態はどんなことがあって死なないってことを。

―総攻撃中―

「隊長、剣が刺さりません」

「とりあえず、殴つてろ」

―総攻撃中―

「隊長、殴ったそばから回復してってます」

「見りゃ分かる。全員全力で攻撃だ」

―総攻撃中―

「隊長、隊員のほとんどが疲労で動けなくなっています」

「正真正銘のバグキャラじゃねーかよ！このオッサン」

「オッサンではない！漢女おとめじゃー！！」

「どの口が乙女っていうんだよ、このボケエエエ！！」

本日2発目の蹴りが変態の顎を捉え、そのまま宙を舞う海賊団の団長。そして落ちると同時に鳴り響く機械音。

【ピロリン♪『白髭海賊団・団長』の『卑弥呼』を倒した】

俺はDCPに映し出された文字を見て、フラッと眩暈がした。

邪馬台国の巫女がなんで海賊をとか、何でこの時期にいんのとか、

色々と考えなければならぬことがあるんだろうけど、何故に女性であつた卑弥呼がこんな筋肉達磨のオッサンになるんだろうか。

……まさか『禁・三国恋姫』では、名立たる武将が女性になつた影で、元々女性だつた武将が男性になつてしまつてゐるのか？

まさか、孫呉の二喬と呼ばれた大喬・小喬も、弓腰姫と呼ばれた孫尚香も男性化してしまつてゐるつていつのか？

「知りたくなかつたよ、そんなことはさー」

俺は膝を抱えて落ち込むのであつた。

そんな中、俺の後ろでは太史慈隊がせつせと縄や鎖を使つて、氣絶したオッサンを拘束しているのだが、もうしばらくこうさせてくれ。必ず、復活するから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6422y/>

『禁・三国無双』 ～孫呉編～

2011年11月29日14時46分発行